＜大川小　還らぬ人へ＞壮絶な体験　語り継ぐ

◎津波訴訟１０月２６日判決（６）只野哲也さん

大川小の保存の是非を巡る公聴会で、ビデオメッセージで思いを伝える哲也さん＝２月１３日、石巻市飯野川中

大川小の教訓とは何か－。東日本大震災から６度目のお盆、母校の石巻市大川小を訪れた只野哲也さん（１７）＝石巻市＝が少し考え込み、口を開いた。

＜今も恐怖消えず＞

「防災の意識を高めることじゃないかな。日頃の成果が災害の時に出るのだと思う」

あの日、先生と行動を共にしていた児童７４人と教職員１０人が津波の犠牲になった。

当時、小学５年だった哲也さんは九死に一生を得て、現在は高校２年になった。心身ともに成長し、「人を助ける仕事に就きたい」と将来像を語る。

大川小にいた児童で助かったのは、哲也さんを含め４人だけ。津波は一緒に校庭にいた３年の妹未捺（みな）さん＝当時（９）＝だけでなく、母しろえさん＝同（４１）＝と祖父弘さん＝同（６７）＝の命も奪った。

巨大地震の後、約５０分間、校庭に留め置かれた。６年の男子が「山さ逃げた方がいいんじゃね」「早くしないと津波来るよ」と担任に訴えていた。

先生の指示で、新北上大橋たもとの三角地帯と呼ばれる堤防道路へ誘導された。海抜約１メートルの校庭より約６メートル高い。「山に登れるのに」と思ったが、ついて行った。直後、北上川から黒い波が迫ってきた。必死に逃げたが、濁流にのまれ、気を失った。

津波の恐怖は今も消えない。ただ、壮絶な体験を忘れてはいけない。そう心に決め、公の場で語ってきた。

あの時、生死を分けたのは何だったのか。「学校と地域が連携して津波の避難訓練をしたり、子どもの声により耳を傾けてくれたりしていたら…」と思う。

被災した校舎を震災遺構として保存するかどうかを巡り、今年２月、市民を対象に公聴会が開かれた。

柔道の試合があった哲也さんは、ビデオメッセージでこう訴えた。

「大川小を残して震災の記憶を語り継ぎ、災害時に助かる方法を一つでも多く考えた方がいい」

一方で「まだ心の整理がついていない人が多くいると思う」と保存の是非を性急に決めず、深く議論することも求めた。

＜若者の役割模索＞

哲也さんにとって大川小は、時に落ち込む気持ちを奮い立たせてくれる特別な場所だ。「せっかく生き残ったのに、何してんだよ」。亡くなった同級生６人の声が聞こえてくるようで背筋が伸びる。

亀山紘市長は３月、震災遺構として大川小校舎を残すことを決めた。

この夏、市内の仮設住宅の集会所に大川小の卒業生数人が集まった時、哲也さんは保存の在り方の議論に必要なポイントに気付いた。「俺たちの年代の考えをほとんど知らない」。大人の目ばかり気にしていた。

「校舎を防災に役立て、自分たちのような悲しい思いをする人を二度と生まない」との信念がある。

若者同士で何ができるか。生かされた命に感謝しながら、哲也さんは模索を続ける。